

本薬師寺旧境内の調査

—第178-1次

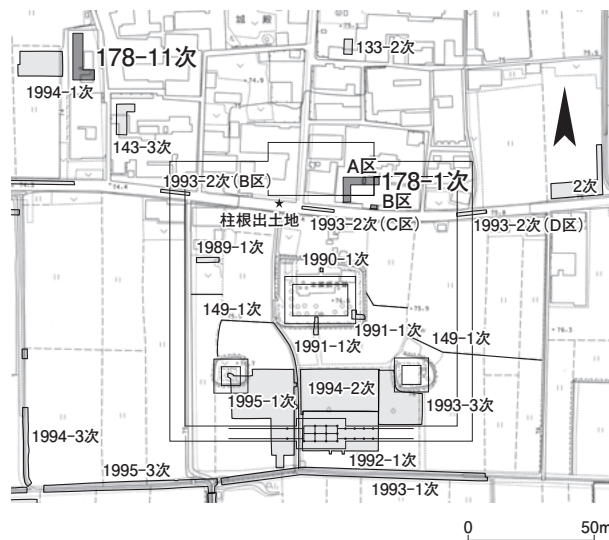
1 はじめに

個人住宅建設にともなう発掘調査である。調査地は本薬師寺金堂の北方30mに位置し、平城京薬師寺の伽藍配置では、講堂東南隅にあたる（図Ⅱ-13）。調査区は、平城京薬師寺と同規模の講堂が存在する可能性を考慮し、講堂東南隅の側柱・廂・雨落溝等の検出を目的としたL字形のA区と、浄水槽設置箇所のB区の2ヵ所に設定した。調査期間は、2013年6月11日から6月27日である。

2 調査成果

基本層序は、地表面から、①宅地の基礎となる造成土、②オリーブ褐色細砂層の遺物包含層、③暗黒褐オリーブ色粗砂層の遺物包含層、④暗オリーブ褐色細砂の洪水層順である。②・③層は部分的に検出し、遺構は④層上面で検出した。

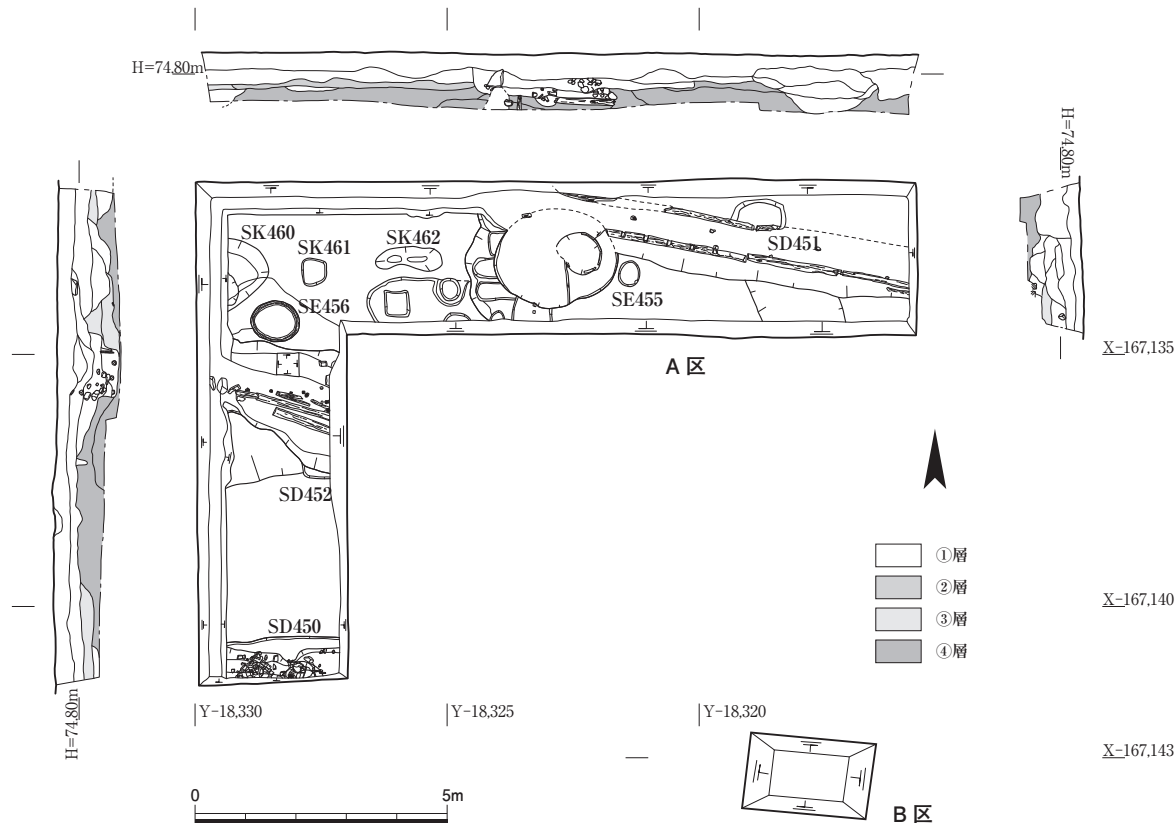
A区は、遺構検出面で精査したが、本薬師寺講堂に関



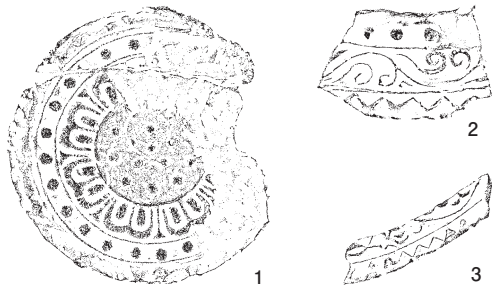
図Ⅱ-13 第178-1次調査区位置図 1 : 3000

係する遺構は検出されなかった。B区は、浄水槽設置のため、地表面から1.6m掘削したが、湧水が激しく遺構が確認できなかったため、簡略な土層を記録するに止めた。A区で検出した遺構は、平安時代以降の溝1条と近世の溝2条、中近世代の土坑14基と井戸2基などである（図Ⅱ-14）。

東西溝SD450 調査区南端で検出した溝で、東西に伸びる。溝は素掘りで、④層を掘り込む。調査区外に延びるため規模は不明だが、現状での規模は、幅0.80m以上、長さ2.3m以上である。溝内には、本薬師寺創建期の瓦が集積していたが、平安時代後期の土器も出土しているため、掘削時期は不明だが、埋没時期は平安時代後期（10世紀）以降とみられる。



図Ⅱ-14 第178-1次調査遺構図・土層図 1 : 150



図Ⅱ-15 SD450出土軒瓦 1：4

東西溝SD451 調査区北端で検出した溝で、丸太と礫と瓦を用いて護岸している。南側の護岸材には、炭化した棟木が転用されていた。溝の規模は、幅0.80m、長さ7.1m以上である。溝内からは、中世～近世の土器と瓦が出土している。掘削時期は不明だが、SE455より古いため、埋没時期は近代以前とみられる。

東西溝SD452 SD450の北側で検出した溝で、丸太と礫と瓦を用いて護岸している。溝の規模は、幅0.40～0.50m、長さ2.4m以上である。溝内からは、弥生土器や中・近世の土器と瓦等が出土している。掘削時期は不明だが、SD451と並列していることから、SD451と同時期に機能し埋没したとみられる。

井戸SE455 調査区中央で検出した。井戸掘方の規模は、東西2.4m、南北1.6m以上の不整形円で、井戸枠の直径は、0.90mの円形。東西溝SD451を壊して据え付けている。井戸枠は、木枠を設置後、31×28×3cmの磚を木枠の上に積み上げている。井戸の掘削時期は、近代とみられ、現代まで使用されていた。

井戸SE456 調査区西側で検出した井戸で、木桶の井戸枠が残存していた。井戸の規模は、東西0.96m、南北0.80mの楕円形。掘削時期は不明だが、埋没時期は近代とみられる。

土坑群 14基検出しており、井戸SE455から西側の範囲に集中している。土坑SK460～462からは、中世の土器が出土しているが、その他は、近世以降の土坑である。

(今井晃樹・荒田敬介／神戸市教育委員会)

3 出土遺物

土器は整理用コンテナ1箱、瓦は整理用コンテナ28箱あり、ほかに、東西溝SD451埋土から漆塗りの木椀1点、SD451の護岸材として用いられた近世の棟木の転用材1点、包含層から凝灰岩1点(356g)を取り上げた。ここでは、本薬師寺創建期の瓦類を報告する。

瓦類 本調査で出土した瓦類(表Ⅱ-5)のうち、面戸瓦・熨斗瓦・隅切平瓦・ヘラ描き平瓦は、いずれも古代である。東西溝SD452からは、6276・6641・6647型式のほか、近世の軒瓦も出土し、溝の護岸にも多量の丸・

表Ⅱ-5 第178-1次調査出土瓦類集計表

軒丸瓦			軒平瓦			その他	
型式	種/時代	点数	型式	種/時代	点数	種類	点数
6276	Aa	3	三重弧文		1	面戸瓦	1
6276	E	4	6641	H	2	熨斗瓦	11
不明	古代	3	6641	K	1	隅切平瓦	2
巴文	近世以降	9	6641	O	2	ヘラ描き平瓦	1
			6641	?	1	棧瓦	13
			6647	G	1		
			6647	I	3		
			橘唐草文	近世以降	2		
			不明	近世以降	1		
		計 19			計 14	計 28	
重量		丸瓦 48.3kg			平瓦 115.7kg		

平瓦を使用していた。三重弧文軒平瓦は、東西溝SD451から出土している。

東西溝SD450からは、古代の瓦がまとまって出土した。内訳は、6276Eが2点、6641Hが1点、6647Iが1点、丸瓦10.3kg、平瓦15.6kgである(図Ⅱ-15)。6276E(1)は、瓦当径14.2cm、瓦当厚2.0cmの薄型で、丸瓦端面の円周に沿ってヘラ状工具で溝を入れて接合している。丸瓦部には、瓦当面から10cmの箇所に方形の釘孔がある。灰白色でやや軟質。6641H(2)は、瓦当厚5.2cmで、顎の長さは不明。灰色で硬質。6647I(3)は、顎部が剥離したもので、段顎の長さ5.0cm、顎の深さ0.7cm。灰白色でやや軟質。6641Hは本屋根用、6276Eと6647Iは裳階用の創建瓦である。本屋根用と裳階用の丸・平瓦も出土した。完形品はないが、本屋根用丸瓦は、段部径が16.5cm。灰色で硬質。裳階用丸瓦は、筒部径が13.7cm。灰白色でやや軟質。いずれも粘土板巻き付けつくりで、筒部と玉縁部を一体で成形したのち段部を貼り付ける。本屋根用平瓦は、狭端幅25.3cm、狭端の厚み2.2cmで、凹面は狭端から約12cmのところまで布目を擦り消している。灰色で硬質。裳階用平瓦は、広端付近の幅22.2cm、広端の厚み1.4cmで、凹面の布目を部分的に擦り消している。灰白色でやや軟質。いずれも粘土板桶巻きつくりである。(今井)

4 まとめ

今回の調査では、平安時代後期の溝1条、近世代の溝2条、中世～近世代の土坑14基、近代の井戸2基を検出した。本薬師寺講堂の南東隅にあたると予想されていたが、講堂に係る遺構は検出されなかった。

遺構面の④層は、井戸SE455から西側が細砂、東側が粗砂という砂質の違いがあり、地下水位が高いこともあって、この層下は湧水が著しい。つまり④層は、川砂に由来する堆積層であり、湧水する④層下に基壇などの遺構が存在する可能性は低く、④層を掘り込む東西溝SD450も講堂に係る遺構とは考え難い。これらの諸点から、SD450が形成される以前に講堂が河川の氾濫によって流出したか、あるいは、講堂が本調査地よりも、さらに北側に存在した可能性が考えられる。(今井・荒田)